

## シリーズ後藤新平人脈考⑭

## 下村 宏

明治・大正・昭和の逓信省役人。台湾総督府民政長官・NHK 会長・貴族院議員・拓殖大学学長等、逓信省入省以来、後藤新平の背を追う様に各種重責を歴任。新平の側近であった永田秀次郎と同様歌人でもある。号は海南。

和歌山出身。官僚、ジャーナリスト。東京帝大政治学科卒。逓信省に入り、後藤新平逓相により新設の貯金局局長に抜擢。1915(大正4)年台湾総督府民政長官。一方で中央大、早大、東京商大などで財政学を講じる。1921(大正10)年朝日新聞社に入社、欧米に特派。1922(大正11)年専務に就任し、村山龍平と上野理一の個人経営から資本主義的企業への拡大・整備に努力、全国紙としての基盤を確立した。1930(昭和5)年副社長。この間、中央放送審議会委員。1936(昭和11)年退社。1937(昭和12)年貴族院勅選議員。1943(昭和18)年日本放送協会会長。1945(昭和20)年鈴木貫太郎内閣の国務大臣・情報局総裁となり、ポツダム宣言受諾にいたる国論対策、終戦時の「玉音放送」実現に大きな役割を果たした。拓殖大学第6代学長も務めた。佐佐木信綱門下の歌人としても知られる。



【1875年～1957年】

## 【新平から破格の人材抜擢を得る】

郵便貯金事務の発達膨張とともに、新平は官庁組織の改正を図り、明治42年(1909)7月をもって、従来の郵便為替貯金管理所を削り、新たに郵便貯金局を設け、年少気鋭の下村宏をその初代局長に任用した。彼は当時まだ勅任局長たるべき年限に達していなかったのを、奏任官のまま、多くの先輩を抜いて局長に簡抜された。これもまた新平一流の型破りの人事行政で、省内の空気一新に貢献した。



新平の目標は、いつでも実際の仕事であり、その仕事の中心は人間であった。「一に人、二に人、三 **【新渡戸稲造】**

に人」それが彼の一生の信条であった。そうして、形式の嫌いであった新平の性質は、いつでも、その型破りの人事において、最もよく現れた。新平は台湾において **新渡戸稲造**を官等(官職の等級)と段違いの高給で採用したり、年少の **賀来佐賀太郎**を局長代理としたり、満鉄理事に30そこそこの **田中清次郎**や **犬塚信太郎**を抜擢したりしたと同じ筆法で、逓信省でも、鉄道院でも、当時の官界には珍しい破格な人物抜擢を断行した。



【賀来佐賀太郎】 【犬塚信太郎】

当時この抜擢を蒙った一人である下村宏は、次のごとく物語っている。

「当時の逓信省は人材のはけ場がなく、したがって湯川寛吉君は住友へ逃げ出す、川村・松木・中村といった出来物も他の省へ転任するといったような始末であった。後藤逓相が「貯金局」を新設して自分を簡抜して下さった時、自分はまだ32~33歳であった。奏任「三等」で局長になったわけで、その後は年限が到来するのを待って、ギリギリに官等と俸給を上げて下さったのと、戦後の官吏増給が行われたために、私は一年間に倍増の収入を得るようになった。」

## 【脱線王後藤新平】

下村宏に「脱線王後藤新平」という文章がある。

「定石外れ奇襲専門の座談家としては先ず蛮爵後藤新平君を推さざるを得ない。筆者はかつて、大風院殿脱線棲霞大居士という院号をおくったが、ひどい事をいうと云いながら会



心?の笑を漏らしていた。「後藤新平の座談はとても面白い痛快である、その片言隻句がキビキビと冴えてくる。」

(『南船北馬』より)

## 【玉音放送の仕掛け人-ラジオで全国民に一斉周知】

「玉音放送を作った男たち」<NHK BS プレミアム2015年8月1日より>

天皇陛下自らが国民に終戦を告げた「玉音放送」には、それを実現へと導いた仕掛け人がいました。時の内閣情報局総裁下村宏。彼は昭和18年にいち早く玉音放送のプランを着想し、昭和20年8月には天皇陛下に単独拝謁して実施を訴えました。そして実現にこぎつけるや、それを阻止しようとする反乱軍と対峙し、実行総責任者として15日の放送を死守したのです。



(朝日新聞)